

中央放射線部

1. スタッフ（平成24年4月1日現在）

部長 杉本 英治、仲澤 聖則
 技師長 増渕 二郎
 副技師長 神山 辰彦、高草木 浩、柳沢三二郎、川村 義文
 放射線技師（総数）69名

中央放射線部は、画像診断部（核医学部門を含む）、放射線治療部門の2部門からなる。職員は、放射線画像診断医、放射線腫瘍医、診療放射線技師、看護師、事務職員など、職種が異なる総勢100名を越す職員で構成されている。

2. 画像診断部門の特徴

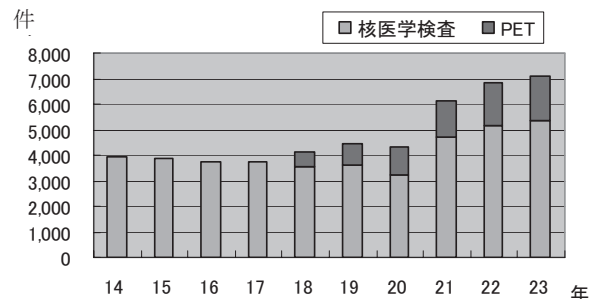
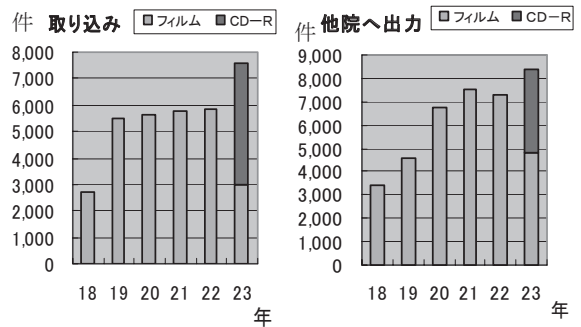
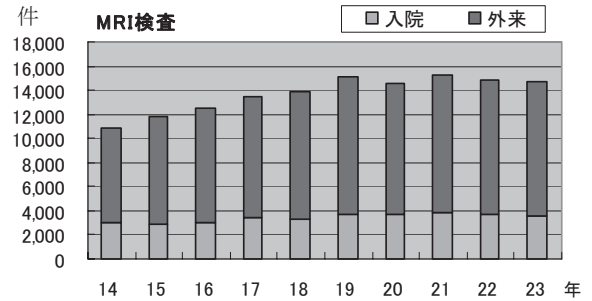
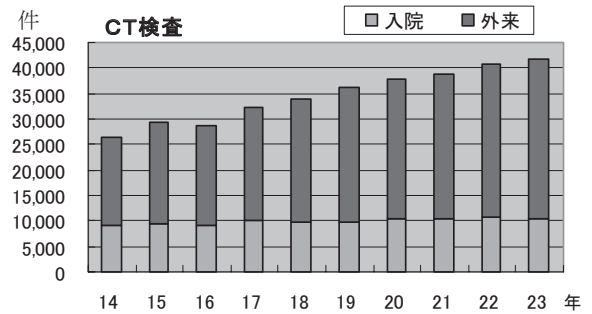
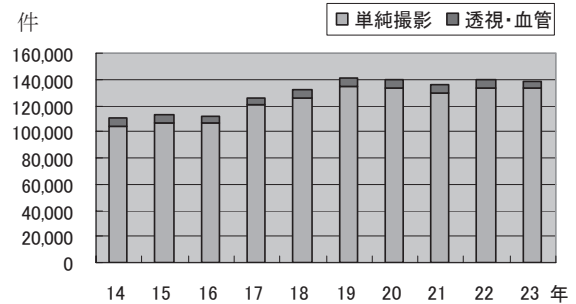
一般撮影、MRI、CTをはじめ血管造影（IVR）など、多種多様な検査を行っている。検査機器の配置も本館・新館救急・血管内治療部・OP室・子ども病院と病院全体に広がっている。各装置は常に最新の医療を行うべく変革が進んでおり、検査画像はすべて電子カルテから閲覧可能となっている。画像情報の利用に対する利便性の向上を常に進めており、病院情報システムは、昨年度部門システムの更新も行い安定的に稼働している。

一般撮影はCRからFPDへと検査の迅速性向上のための順次更新を行っている。MRIは昨年度、新MRI棟を建設、今年度3T稼働、秋には3T 2台目の稼働を予定している。本館MRIコーナーで5台の装置が稼働することとなる。（他に子ども病院に1台）CTはすべて64列以上の装置となっており、心臓検査等も実施している。患者数は増加が続いている。また3D画像もルーチンで作成を行い、より高度な診断情報提供を行っている。

他院との放射線画像のやり取りについて、昨年までは持ち込まれたフィルムはデジタイザーで読み取り、院外への画像提供はフィルムを出力していた。しかし、画像はデジタルデータのままで受け渡しが可能である。県内の条件整備も進んできたことにより、当院でも昨年1月よりCD-Rでの出力提供を開始、4月には持ち込まれるCD-Rの読み込みも開始した。現在では他院持ち込み画像が電子カルテから直接参照可能となっている。

核医学は、ガンマカメラ2台（スペクトCT）の更新が終了した。検査の種類は多岐にわたるが、骨シンチが45%ともっとも多く、負荷心筋SPECTと続き、検査全体の7割に達する。最近では脳血流統計解析ソフトの活用やMRI・CTとSPECT画像のfusionが盛んに行われている。PET-CTも順調に稼働している。

3. 画像診断部門の年ごとの推移

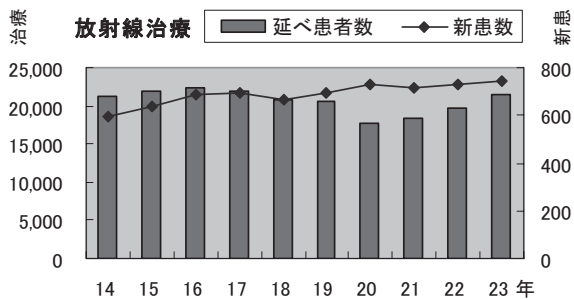


4. 放射線治療部門の特徴

治療部門ではライナック3台体制の中、昨年度10月より1台の更新が行われた。腔内照射装置（新型コバルト線源）も順調に稼動している。4台で放射線治療を行っている。

ライナックでは、全身照射、定位放射線照射（頭部）に加え、20年度より体幹部定位照射（主に肺）、21年度よりIMRT治療（主に前立腺）をスタートさせ、昨年の更新に合わせて高精度放射線治療の適応拡大を進めている。

5. 放射線治療部門の年ごとの推移



6. 今後の目標

放射線部門では、安全で安心な医療の提供を目標にスタッフの教育・研修を行うと共に、高度医療への貢献が必要と考える。診断部門では、MRI棟（西棟新館）の稼動（3.0T）。治療部門では、更なる高精度放射線治療の適応拡大を目標としたい。放射線部門は外来リニューアルも終わり、新しい放射線部として、病院機能の一翼を担って行きたい。